

題目 「対話による道德教育を目指して—ペスタロッチに基づいて—」

指導教官 山口 健二

発表者 安藤百合子

I 題目設定の理由

平成二十年度学習指導要領において、生きる力を育成するため道德の時間を要として道德教育は学校教育全体を通して行われる必要があることが明記された。道德教育が重要視されている現在の世の中において学校教員として生きていくために道德教育について深く学びたいと感じた。また教師の教え込みではなく、子ども同士の対話を重視する授業の展開ということも注目されるようになってきている。実感を伴った道德教育が可能になると思えるが、その実践を見るに、満足できるものではなく、よりよい道德教育が行えるのではないかと考えることとなった。

そのような中で『ペスタロッチのシュタンツ便り』に出会い、貧困と粗暴の中にある子どもたちに道德的情調の育成を試み、可能にしているペスタロッチの実践に感銘を受け、現代にも活用できる教えがあると感じ、この題目を設定した。

II 論文構成

第1章：ペスタロッチの教育実践と思想

第4章：ペスタロッチと対話

第2章：『人類の発展における自然の歩みに
関する私の探究』

第1節：言葉を毎日の家庭的な場面や境遇結
び付ける実践

第1節：道德的状态とは—他者の利益との
かかわりの中で—

—『ゲルトルート児童教育法』より

第2節：道德的状态に至る三段階

第2節：対話を用いた道德教育

(クラブキーの解説をもとに)

第3節：対話による善への飛躍

第5章：今日の道德教育におけるペスタロッチ
研究の意義

第3章：『ペスタロッチのシュタンツ便り』

第1節：子どもたちの心を開くための実践

第1節：モラル・ディスカッションとの対比

第2節：純粋な感情によって道德的情調を
生み出す実践

第2節：平成20年度版学習指導要領との対比

第3節：善行を確実に広く実行できるよ

第3節：よりよい道德教育へ向けた提唱

うに技能を鍛える実践

III 論文の概要

<第1章 ペスタロッチの教育実践と思想>

本章ではペスタロッチという人物の概要とその思想について彼の著書とともに述べている。またその経緯の中からもなぜ道德教育を取り上げて論文を構成していくかについての理由も述べている。

<第2章 『人類の発展における自然の歩みに関する私の探究』>

本章では『探究』の中から、ペスタロッチの道德教育観を考察した。

ペスタロッチは人間の成長過程を動物的状态、社会的状態、道德的状态の三段階に分類している。生まれのままの自然な成長の中にある動物的状态は外部の様々な影響を受け、墮落することで社会的状態に至る。社会的状態の中では、人間は社会の法や習慣に従って、墮落をおさえる状態に至るが、その振る舞いは強制によるものであり、自分の利益を中心に考える。これに対して他者の利益を優先するに

たった状態が、道徳的状态であるとされている。社会的状態から道徳的状态に至るには自己の欲求である我欲よりも他者への好意を優先するという道徳的情調の大きな飛躍があるが、この飛躍についての記述がなされていないため、次章以下で考察していくこととなる。

<第3章 『ペスタロッチのシュタンツ便り』>

本章では、『探究』より明らかにしたペスタロッチの道徳教育観（他者の利の優先）に至るまでの“飛躍”の実際を彼の実践より明らかにしている。

『ペスタロッチのシュタンツ便り』はシュタンツにおける貧民への教育において、主に道徳面での教育を重視した実践とその体系化を記した著書である。彼の道徳的情調の育成の手段としては、主に子どもへの語りかけを通して行われていることが読み取れる。子どもの心に道徳的感情を直観させる段階、道徳行為を身につける段階、道徳的感情を概念化し子どもの心に道徳的情調を確立させる段階のすべてにおいて対話が用いられている。子どもたちが体験したことを教師が言葉で表すことで、子どもが至ったかもしれない状態を教師が現実味をもって話し、道徳的感情を喚起する様子が記されている。

<第4章 『ペスタロッチと対話』>

本章では道徳的情調への飛躍の手段が対話により行われていることを明確にしている。まず1節において道徳教育の最終段階である、言葉を用いて道徳的感情を概念化し、道徳的情調に至るプロセスを『ゲルトルート児童教育法』に明記されている事例より示した。

2章ではペスタロッチの道徳教育における対話の重要性をクラブキーの解釈をもとにまとめている。子どもに道徳的情調を育成するためには、3つの過程が必要であることを明確にしている。①心を開くこと②道徳的行為③反省である。教師と子どもとの対話では、①の段階である道徳的感情を喚起することにつながる。子どもと子どもとの対話においては、道徳的価値が明確でない葛藤の状態において価値を生み出すことにつながり同時に②の道徳的行為をうみだす。子どもが自分自身と対話することは③の反省を生むことで道徳的感情を明確化し道徳的情調へとつなげる。以上のように、道徳手情調の獲得の過程においては対話が重要である。道徳的情調の獲得は他者の利益を獲得する情調と同様であり、つまり道徳的状态への到達を意味する。そのため道徳的状态への飛躍は様々な対話を通して獲得されるといえる。

<第5章 『現代の道徳教育におけるペスタロッチ研究の意義』>

現代の道徳教育で獲得を求められている道徳性は二つに分類することができる。一つ目は価値のはっきりした道徳的情調であり、教師が一定の価値をもって指導することが求められる。二つ目は、価値が曖昧な道徳的情調であり、子どもが自分で価値を判断していくことが求められる。ペスタロッチの道徳教育を用いることでどちらの道徳的情調も獲得できるということが本研究より明らかとなった。前者の道徳的情調に関しては、教師が子どもと対話することで子どもを導くことができ、後者の道徳的情調に関しては子どもと子どもが対話することで他者への理解を開き、新しい価値観を生み出していくことができる。また、この二つの道徳教育方法は相反するものではなく段階的に発展するものとして扱うことで他者の利益を優先する道徳的情調へと飛躍することが可能になる。

V 主要参考文献

- ・ペスタロッチ、ヴォルフガング・クラブキー著 森川直訳『改訂版ペスタロッチのシュタンツ便り クラブキーの解釈付き』東信堂、2004年
- ・ペスタロッチ著 虎竹正之訳『探究』玉川大学出版部、1984年
- ・ペスタロッチ著 長尾十三二訳『ゲルトルート児童教育法』明治図書出版株式会社、1976年
- ・長尾十三二著『ペスタロッチ』清水書院、1991年
- ・小寺正一、藤永芳純編『三訂 道徳教育を学ぶ人のために』世界思想社、2009年